

### 第三回「国際日本学シンポジウム」開催によせて

お茶の水女子大学学長 本 田 和 子

かつて、「国語」「国文学」あるいは「国史」と呼ばれていたジャンルに、いつの頃からか「日本語」「日本文学」「日本史」という呼称が与えられるようになっていきます。前者の場合、無意識のうちに現体制下の文化が絶対視されて、国語・国文学などと呼ばれるそれらが私たちの唯一の文化と理由もなく特定されてしまいがちなものに対して、後者の場合は、それらが世界に広く分布する多様な言語・文化の一つに過ぎないことを、これも無意識裏に自覚させてくれて、自国文化を相対化するのを助けていると言えないでしょうか。「日本文化」とよぶことで、他の多様な文化と並列し比較することが可能となり、そのことによって、根拠のない自己尊大視や自己中心性から、脱皮することが出来始めたということかも知れません。

確かに、私たちの大多数が使用するこの国の言葉は、そして、それによる表現の数々は、多種多様な世界言語と世界文化のなかの一つのジャンルに過ぎませんし、私たちのアイデンティティを形成する日本の歴史にしても、世界史の一隅に位置して、他国史との差異において顕在化される一地方史に過ぎないとも言えましょう。私たちが、いま、このことに気づき、しかも、格段の抵抗もなくそれらを肯定することが出来るのは、「国語」から「日本語」へのこの変化に負っているとは言えないでしょうか。改めて言うまでもなく、名称の変化は、単に現象面で呼び方が変わることに止まらず、それ以上に、共通の意識の覚醒と変化を促すという効果が大きいのでしょうか。

本学の博士課程のこの分野は、平成11年度から、「国際日本学」として改組されました。日本語・日本文化あるいは日本史などが、「日本学」として統合された上に、「国際性」という新しい光によって照射されることで、新たな側面が浮き彫りにされ始めているようです。たとえば、他文化との比較において自文化の特性を見定め、同時に、他者の視点による自文化の検討を通じて自身の研究の特色と偏向に気付かされる、それは、今後のこの分野の研究の発展にとって極めて有意義であると言えましょう。

さらに、本シンポジウムにおいては、とかく言語による表現物が研究の中心におかれがちなこの分野に、「音楽」「舞踊」などの芸術表現の分野が組み込まれています。より脱領域的な研究の広がりとその統合が志向され、同時に、研究主題や手法そのものの相対化も試みられているということでしょうか。国際的には他者の視点との共存によって広がりを図り、国内的には諸領域の統合によって広域的な日本学の構築を企てる、こうした試みに拍手を送り心からの声援を送りたいと存じます。日本文学も日本史も、ともにその伝統的な蓄積を誇る研究分野ですが、「国際日本学」というこの範疇化によって、それら伝統的研究の分厚い堆積の上に、新しい光が注がれ新しくメスが加えられることでしょうか。「日本学のグローバリゼーション」が、漸く、その実現に向かう歩みを開始したと言ってよいかも知れません。

本日のシンポジウムが、昨年の実績を踏まえつつより一層の成果を上げるであろうことを期待して、言葉不足ながら、一言のご挨拶に代えたいと思います。